

令和 2 年 5 月 14 日現在

機関番号：10101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K18246

研究課題名(和文)美術館における声と公共性に関する史的研究

研究課題名(英文)History of Voice and Conversation in Public Art Museums

研究代表者

今村 信隆 (IMAMURA, Nobutaka)

北海道大学・文学研究院・特任准教授

研究者番号：90793620

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,400,000円

研究成果の概要(和文)：芸術作品の鑑賞場面において、鑑賞者たちの会話や声はどう位置づけられてきたのか。この問題について本研究では、美術批評史や美学思想史に関する歴史的側面と、現代の博物館学との両面から検討した。

まず、17世紀フランスの絵画愛好家たちの著述の分析からは、彼らにとって、会話が鑑賞経験の重要な一部であったこと、会話のあり方が鑑賞の成否にさえ影響を与えるものであったことを明らかにした。加えて、にもかかわらず18世紀以降の哲学者や批評家の多くが、鑑賞の態度としても、作品を論じる方法としても、声や会話に重きを置かなくなっていくこと指摘し、現代のミュージアムにおける声の復権と比較する視座を確保することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

20世紀後半までのミュージアムでは、鑑賞の理想は、静かに、可能であれば孤独に作品と向き合うことであった。しかし現代では、対話型鑑賞に代表されるように、鑑賞場面に他者との会話が入り込み、いわば声の復権とも言える事態が生じている。本研究では、こうした事態の思想史的な背景を示し、現代の鑑賞を考えるための視点を提供することができた。すなわち、20世紀後半までの鑑賞場面を規定していた鑑賞の理想が、実は18世紀以降の歴史的産物であることを指摘するとともに、ミュージアム誕生前夜にあたる17世紀後半のフランスには、むしろ現代に近い、語らいの愉しみと一体になった鑑賞場面がすでに存在していたことを跡づけた。

研究成果の概要(英文)：The main aim of this study is to inquire the history of "voice" and "conversation" of viewers appreciating some art works, especially from the point of view of art criticism, aesthetics, and museology. As a result, we show that:

- 1) before modern museum era, for the art lovers of the 17th century France, pleasant conversation with each other had critical meanings, and in some cases such conversation even shaped experience of viewing art,
- 2) but, many philosophers and critics after the 18th century did not attach importance to viewers' conversation, and this alone-and-silently type of art viewing had dominated galleries of modern museums until the 20th century.

研究分野：美術批評史、美学思想史、博物館学

キーワード：美術批評 声 会話 フェリピアン ド・ピール 美術館 17世紀 対話型鑑賞

1. 研究開始当初の背景

本研究で採った方法は、基本的には、過去のテキストを読解していくという、思想史的なものである。ただしその背景には、単なる歴史的な関心にとどまらない、極めて現代的な問題意識があった。すなわち、現代の鑑賞空間、とりわけ近代的なミュージアムという鑑賞フォーマットのなかで、鑑賞者の「声」や「会話」が、切実な問いとして浮上してきていることに向けられた問題意識である。

ミュージアムでは長らく、少なくとも20世紀の後半に至るまで、展示空間ではある程度静かにふるまうということが、マナーとなってきた。このこと的前提になっているのは、そもそも作品の鑑賞というものは、他者の介入を必要としない、個人的な感性の領域で完遂しうるものだという通念にほかならない。

しかし、他方で20世紀の末頃までには、対話を通じた鑑賞という、もうひとつの理想が拓がり始めている。その最大の立役者となったのはアメリア・アレナスやフィリップ・ヤノウィンといったアメリカの実践家たちであるが、そうした実践は日本にも伝えられ、全国の美術館で行われるようになっていく。他者との会話を媒介として鑑賞するというこの新しい潮流を正しく見定めるためにも、もとより鑑賞にとって声や会話はどのようなものだと理解されてきたのか、という歴史的な検討が不可欠であると考えられた。

加えて、鑑賞における他者の存在をめぐるこの問題は、美術批評や美学思想といった芸術に関する専門的言説を再考するためにも、重要な課題である。批評や美学は、当然のことながら、書き言葉として、エクリチュールの権能をまとうことで登場してきた。このこと自体は、無論、何ら批判すべき事柄ではない。しかし、批評や美学がエクリチュールとして成立し、自らの輪郭を定めていく過程で、口頭の、パロールの営みとしての作品談義が、あるいは鑑賞者たちの「声」が切り捨てられていくのだとすれば、そのことは適切に反省しておく必要がある。美術批評や美学の成立過程を、エクリチュールの歴史として跡づけることは、ひるがえって、美術とは何かという根本的な問いを考えるうえでも欠かせない。

2. 研究の目的

上記の背景を踏まえつつ、本研究は、二つの目的をもって出発した。ひとつは、ミュージアム、特に近代以降の美術館において、鑑賞者らの「声」が忌避され、ときには禁止されてきた経緯を、思想的に明らかにすることである。

もうひとつは、一度は抑圧されたかみえた「声」が復権しつつある今日の状況に鑑み、ミュージアムにおける新しい公共性のあり方について考えるための理論的土台を用意することである。

3. 研究の方法

本研究の方法論的な特徴としては、従来、美術批評史や美学思想史の研究対象とされてきた絵画論等のテキストと、近現代のミュゼオロジーのテキストとを横断的に取り扱い、併せて読むという点が挙げられる。この手法によって、鑑賞場面における「声」や「会話」を、歴史的な問いとしてのみならず、現代の鑑賞場面にも関与するアクチュアルな問いとして浮上させることが出来ると、期待したためである。

具体的には、研究代表者がこれまで取り組んできた17世紀フランスの著述と、さらにその後の18世紀から20世紀にかけての論者たちのテキストを中心に読解しつつ、加えて近現代のミュージアム論との接点や相違点を跡づけた。

4. 研究成果

(1) 本研究では、まず、ロラン・フレアール・ド・シャンブレ、アンドレ・フェリピアン、ロジェ・ド・ピールという、17世紀フランスの三人の愛好家の著作にあたり、特に対話篇・会話篇での議論を分析した。ここで示されたのは、作品を論じるための方法としても、作品を享受する際の態度やふるまいとしても、他者との語らいが理想的なモデルを提供しているという事態である。美的な作品鑑賞が、同時に、社会的な共感のよるこびとともにあるという立論の可能性を、彼らの議論から読み取ることができた。(今村信隆『一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義』、北海道大学出版会、2020年、第1章～第2章)

(2) また、同時に、17世紀フランスの絵画愛好家たちの著述を、その後の哲学者や批評家らの著述と比較するという作業も行った。

18世紀～20世紀の美術批評家たち、たとえばボードレー、ゾラ、ヴァレリーといった論者たちは、作品の前での会話や声を重視せず、むしろそれらを「他者」とすることで、自らのエクリチュールの権能に訴える。あるいは近代美学に一定の完成をもたらしたカントは、「何びとにせよ或る建築物や景色或は詩を自分で美しいと思うのでなければ、たとえ百人の声が一斉にこれを称揚したところで、それによって心からの同意を強いられるものではない」と述べ、趣味判断の自律を説く。さらに、20世紀のリオタールは、「崇高」という概念を論じながら、鑑賞の絶対的な孤独を主張する。こうした議論と比較するとき、実際の絵画作品の前で討論会を行ったり、友人同士による絵画談義の価値を認めたりしていた17世紀の愛好家たちの議論は、いささか素朴なものと思われるかもしれない。

しかし、本研究では、17世紀の愛好家たちの素朴さのなかに、むしろ現代の我々が学ぶべき事柄があるのではないかという点を指摘した。すなわち、美的判断をめぐる共感のよろこび、美的であると同時に道徳的・政治的でもある共通感覚、学問的思弁では十分に論じることができない日常的な趣味の主題といったものは、美術や感性を学問的、専門的、体系的に論じるエクリチュールからは漏れてしまいがちではあったが、これこそがいま、再び喫緊の課題として浮上してきていると考えられたのである。

(今村信隆『一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義』、北海道大学出版会、2020年、序章 / 今村信隆「崇高論と孤独の美学 絵の前で語ること / 語らないこと」(学会発表、北海道芸術学会第31回例会、2018))

(3) さらに、上述したド・ピールとフェリビアンが、会話篇形式で著した著作のなかに、絵画作品の「記述」が含まれているという点についても分析を試みた。「記述 description」は、語義のうえでも、形式としても、エクリチュールとしての性質を強く主張する。これが、作中人物たちが交わす架空の会話のなかにあって、どのような仕方でも正当な位置を与えられているのかという点について検討した。その結果、ド・ピールとフェリビアンはそれぞれ、「記述」という特別な作品分析の手法を、語らいとしての体裁を損なわない方法で、会話篇という語らいの物語のうちに導入していたことが示された。

(今村信隆『一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義』、北海道大学出版会、2020年、第6章)

(4) 鑑賞における「声」や「会話」という問題を敷衍し、次の研究へとひろげていくために、わたしたちはさらに、鑑賞と教育という問題にも着目した。対象としたのは、明治末期から大正期にかけての日本の事例である。ここでは、孤独な鑑賞の理想と、他者からの介入を前提とする教育との矛盾に、論者たちがどう折り合いをつけようとしているのかが分析された。論文では、画家の岸田劉生、教育家の小堺宇市という二人の論者を取り上げるにとどまったが、美学思想という理論と、教室での教育という実践との間に横たわる根深い矛盾を具体的に例示することができた。

(今村 信隆「大正期・昭和初期の「対話型鑑賞」-岸田劉生、小堺宇市、関衛の鑑賞教育論から-(1)」、『北海道大学文学研究科紀要』157号、2019年)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 今村信隆	4. 巻 157
2. 論文標題 大正期・昭和初期の「対話型鑑賞」 岸田劉生・小堺宇市・関衛の鑑賞教育論から (1)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 北海道大学文学研究科紀要	6. 最初と最後の頁 49-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 今村信隆
2. 発表標題 崇高論と孤独の美学 絵の前で語ること / 語らないこと
3. 学会等名 北海道芸術学会第31回例会 (於北海道教育大学札幌駅前サテライト)
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 今村信隆	4. 発行年 2020年
2. 出版社 北海道大学出版会	5. 総ページ数 260
3. 書名 一七世紀フランスの絵画理論と絵画談義	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----